

吉田 英子さん(国立市立第七小学校教諭)の講演から

男女混合名簿を实践して

<自分の性を肯定できない女の子たち>

話したいことはいっぱいあるんですが、時間があまりないので、簡単に話をします。今から13年前に私が、小学校の5年生・6年生と持ち上がり子どもたちを持ったときの事です。5年生まではとても活発だった女の子たちが、6年生になってから大変消極的になってしまったんですね。たとえば、「授業中でわかっているはずなのに手を上げない。」「給食もバンバンおかわりして食べていたのにしなくなる。」「休み時間にもあまり外へ遊びに行かないで、教室や廊下でこじんまり固まっている。」というようなことがありました。

なぜ女の子たちがこんなに消極的になってしまったんだろうと思いました。そこで隣のクラスの先生と二人で、ちょっと考えてみようと思い、子どもたちに「女の子に生まれてよかったですか?」「男の子に生まれてよかったですか?」というようなアンケートを、簡単な気持ちでとったんです。そうしましたら、男の子たちは男の子に生まれて良かったという答えがすごく多かったんです。けれど、女の子たちは、あまり自分の性を肯定してなかったんですね。中には「女に生まれて良かった。」と答えている女の子もいんだけれど、その理由にびっくりしたんです。一番多かったのは、「女の子はスカートもズボンもはけておしゃれができていい。」「髪形を色々変えられる。」「大人になったら化粧ができる。」とかで、外見的なところで肯定しているんですね。それからあとは「女は楽でいい。」と言うんですよ。「大人になっても働かなくていい。」「重い物を持たなくていい。」「女は大学まで行かなくていい。」とか、そういう形で自分の将来に対しての展望があって、何かやりたくて女で良かったと言うんじゃないんですよ、女の子の場合は。

男の子場合は、なぜ男に生まれて良かったかと言うと、一番多いのが「男の方が偉い。」と書くんですね。あとは「将来いい会社に入っていい給料が貰える。」「スポーツがなんでもできる。」「体をいっぱい動かして何かができる。」とか、男の子が自分の性を肯定する場合には、すごく、こう未来に羽ばたくってというイメージが出るんだけれども、女の子たちにはそれが出ない。

そのアンケートを私は隣のクラスの女の先生とやったんですけど、二人でもう愕然としました。なんと私たちが「女の子の自立を支える教育」ということをしてこなかったのか、ということをももの凄く反省したんです。

<第1歩 運動会を男女混合でやってみよう>

やっぱりこれからは女の子が自分の生活を自分で支えるという、そういう教育をしでいかなければならないということですよ。そのために何をしたらいいのかということを考えました。

暗中模索でしたが、その時に学校の中を見渡したら、本当に学校という所が男と女という軸で管理されているということが見えてきたんです。それで、できるだけ学校の中で男の子と女

の子を分けないようにしよう。分けることによって男とか女とかを子どもたちが、知らず知らずにも意識してしまうんだから、分けることを絶対にやめようと思いました。

そこで、二人で何をやろうかと言ったら、その時、たまたま 6 年生になっていたんですけど、秋に運動会があったんですね。その運動会の種目が、6 年生は組体操と棒たおしと徒競走があったんです。それをともかく混合でやろう、ということで計画しました。その時 4 クラスありまして、一人は年配の男の先生、一人は年配の女の先生、私たちがまだ若い 30 代の始めの頃だったので二人で学年の先生に話かけて組体操と、棒たおしと、徒競走をともかく混ぜて一緒にやろう、ということをご提案したんです。

組体操はそれまではだいたい男の子たちがピラミッドや塔を作るんですけど、女の子たちはばかりで手をつないで波を作っているのが、なにしろ添えものみたいだったんです。それを男の子も女の子も混ぜてピラミッドを作ったり塔を作ったりすることをやったんです。

最初は本当に女にそんなことができるはずないとか、ケガしたら大変だとか色々言われましたけれども、一生懸命練習してピラミッドの一番上に女の子が立つグループがありましたし、そういう形でやりました。棒たおしもまぜこぜでやりました。けれども、徒競走だけは男の先生が「万が一男の子が、女の子に負けたらかわいそうだから絶対だめ。」と言って譲らなくて、それだけはだめだったんですよ。リレーとかそういうのはね、まぜこぜで走りますから、あとで男が追い抜くとかあるから、それでいいらしいんだけど、「徒競走だけは絶対だめ」と言われてだめだったんです。けれども、とりあえず、そこで一つ、運動会の組体操と棒たおしを男女混合でやるということで、一つ突破したっていうのがありました。

< 卒業式を男女混合順で行う >

その年の 3 月の卒業式にも、それまでは男が先、女が後に入って来て、座るのも男が前に座ってたのかなあ？ それで、卒業証書を貰うのも男が先に貰って、女が後に貰うという卒業式だったんですけど、それをいろいろ理由を付けまして、背の順にしようということにしました。

男の子と女の子をまぜこぜにして小さい順に並んで、入場してくる。座る時にもそうやって座る。証書を貰う時も背の順で前から貰う、という形で行いました。

< 男女混合名簿を始める >

卒業式をクリアしてから 4 月になって、私が 3 年生、そしてもう一人の彼女が 1 年生の担任になったんです。4 月になって新年度を機にそれじゃあもう名簿、出席簿、指導要録を全部男女混合にしようって、二人で始めました。

始めたんですけど、私もそれまでの 10 何年間か、男女別名簿でしっかりやってきましたので、最初に新任で中野の教員になったその時に、出席簿というのはそういう物だと思込まされたものだから、絶対男が先で女が後じゃなきゃいけないんだ、という思いがどっかにあったんですね。それを男女混合にした時には本当にいいのだろうかと思って、6 月に都教委の監査が入るとい話を聞きまして、そこで何か言われるんじゃないかと思、もう、ありとあらゆる法律書を全部開いて教育に関するものを調べたんです。けれど「出席簿は男が先で女が後。」なんて明文化されたものはなに一つないのです。法律にないものだからこれは大丈夫だろう、ということでそのままやったんです。そしたら監査は「この学校は面白い学校ですね。混合の方がいらっしゃるなんて、過渡期なんではないか。」というふうなお話を 13 年前だった

んですが、受けまして一応クリアーしたんですね。一応監査をクリアーしたものですから、そのへんから大丈夫だから大丈夫だからと言って、親しい人たちに呼びかをしまして、少しずつ国立市内の中で混合名簿を始める先生たちがポチポチという形で出てきたんです。

< 男女混合で並ぶ そこから見えてくるもの >

ただ、その時の私たちは、ともかく学校の中で男と女を分けるのをやめようということでした。あとは一番目立つのは並び方なんですよね。集会とか朝会の時に、だいたい男…一列、女…一列で小さい者順に並んでいるんです。それも全部男女混合に一列に背の順にして1、2、1、2、という番号をかけて、1の人2の人という感じで男女混合の二列を作ってそれで並べるということをしました。それからあと名前を呼ぶときに男の子は何々君、女の子は何々さん、と呼んでいたのも全部やめまして「さん」で統一しました。

そういう事もいっぺんにできたわけではないんですけどね。混合名簿を始めることで見えてくるものってすごくあって名簿を一つ混合にしてみると、これもおかしいんじゃない、あれもおかしいんじゃないみたいな形になってくるんですよ。並び方を男女混合にして二列に並べると、そこで見えてきたものっていうのが何かと言うと、キチッと並べる意味はあるのだろうか、ということでした。

他の教員から批判を受けたなかで、「男女混合で並んでいるのは見苦しい。みっともない。だらしがない。」と言われたんですよ。朝礼などで男一列女一列でピシッと並んでいるというのが、すなわち秩序正しい、規律があると思込んでいる教員が多いものですから。そうなってくると、朝礼や集会の時の掛け声も「きをつけ!」「前へならえ!」とか物凄い軍隊口調で言ったりするんですよ。だけど混合で並んでいて、男の子と女の子と入り交じって並んでいますと、そういう掛け声すらが、なにか不釣り合いなんですよ。「きをつけ」「まわれ右」とか言われると凄く嫌だなど、自分の中でわかってきたんですね。だから混合名簿をすることで、私自身が今までやってきてしまった管理的な体質というのかな、そういうものが凄く見えてきたし、また学校の中の管理的な体質というのが凄くよく見えるようになりました。

< 混合名簿 区別と差別 >

混合名簿を始めた時に、教員の人たちから一番多く聞いた批判というのは、「自分たちが男女別にしていることは、差別でなく区別である。」ということを実際に言っていましたね。それから「名簿なんて言うことは些細なことなんだから、もっと本質的なことにせまれ。」とも言われましたし、「子どもたちに混合名簿、混合並び方なんて言って強いるのは良くない。子どもの自主性に任せるべきだ。」というようなことをおっしゃる偉い先生いました。

ただ、今までの並び方とか名簿だって子どもが選択してやったものじゃないんだけど、どういうわけかその時その人たちは「子どもの自主性に任せるべきだ」というふうなことをおっしゃったり、「民主教育を進めていけば男女差別は解消する」ということをおっしゃる先生もいました。それから居直られて「そんなの俺の趣味にあわない。俺は男女差別論者だ。」とかなんとか怒鳴ったり、いろいろな人がいましてね。本当に今だったらそんなこと言う人は袋叩きにあっちゃいますけど、13年前ですから、どっちかというとながらやっていることの方が出る杭みたいな感じだったので散々叩かれました。

< 職場としての学校 その中の性別役割分業 >

男女混合名簿に対する批判の中である男の先生から「そんな男女平等平等と言うなら女も、もっと仕事しろ」って言われたのはこれは本当に反省しました。と言うのはね、学校という所は先程どなたかが男女平等の場所だとおっしゃったんですが、私も学校はホントに男女平等がうまくいってる所だと思って教員になったんですよ。ところが教員になってみましたら、私が中野区で教員に採用されて、一番最初にさせられた仕事というのは、お茶汲みだったんですよ。職員室へ朝早く行って先生たちのお茶を汲む仕事をやらされたんです。ホントにあれはびっくりしたんですけど、男の先生と私と一緒に採用されたのにもかかわらず、その男の先生はなんにもしないんですよ、朝。ところが私は朝学校へ行くと真先にしなくちゃならない仕事は、教室に行って子どもたちにおはようと言うことではなくて、まず先生たちの 30 何人分のお茶碗の名前、これは誰さんのお茶碗で誰さんはどの人で何処に座っていてとか覚えてお茶汲みをすることから始まりました。へえ学校ってそんな、うそじゃんとかいう思いがあったんですよ。

そこで学校というところを見ましたら、学校はもうほとんど男のある程度年配の男の先生たちで、すべて企画運営がされていたのです。当時はもう 20 ウン年前になりますけど。それで職員会議でも全部企画運営委員会とかで決められていますから、議論するなんてことはまったくなくて、決められた内容が伝達されていくという感じでした。

それから学校の中の先生たちの校務分掌というのがありまして、一応校長教頭がいてその下に教務主任がいて、教務主任・生活指導主任・何々主任というのは全部ほとんど男がやっていて、女がやっているのは給食主任とかあとは図書とか美化清掃とかナンカそういうような感じのことは女の先生がやるんだけど、そうじゃないところは皆男の先生がやっていて、学校の中も先生たちの社会も性別役割分業がしっかり浸透していた、とういうふうなことがあったんです。だからそういう中で私を含めてですが、女の先生はホントに男の先生に依存するというか、依存体質をしっかりと身につけていました。私はそれまでは教室の蛍光灯が切れたりすると、隣の男の先生を呼んで来て・「蛍光灯取り替えて」と言ったり、やれテレビがナントカだとか、電気関係がナントカだとかいうと、すぐ用務員さんに頼んで来たりして、はなっからそういうことは自分はやらない、みたいなことがあったんですよ。そして責任のある仕事は、なんとなく避けよう避けようということがありました。それを男の先生に、混合名簿などやってくれていた、そういう先生に言われたものだから、そうだと思ひましてね、それからはホントに学校の仕事は一生懸命引き受けるようになりました。

主任という言葉は主任制に反対していますから私は主任と言わないで連絡係と言っているんですけど、いわゆる教務主任というのもやっていますし、今も私やっているんですけど、そういうナントカ主任とかというの全部自分でやれることはやるとしながら自分も変えていく、とういうふうなことで少しずつ皆に認めて頂けるようになったのかなという感じです。

< 混合名簿の現状 >

国立というところは大変小さい所で小学校は 8 校しかないんです。今、国立の小学校では昨年度のデータなんですけど、小学校の中の 90%以上のクラスが混合名簿になっています。並べ方もだいたいそのくらいにはなっています。中学校は 3 校ありますが、昨年度 3 校のうちの 1 校が全校で混合名簿を使用しています。

そこで混合名簿がネックになる一つとしてはその保健関係の統計処理があるんですけども、

これもですね国立の場合には、養謎の先生がわりと協力的で名簿に関しても女か男か分かるようにどこかに印を付けてくれればいいと言われていたので、混合名簿にしたときに女の子の番号の所に丸を付けとくんですね、そうすると養護な先生が自分が統計するときには。そこは女の子、みたいな形で全部統計を取っていくというふうなことをしています。それもね、統計的に身長とか体重とかそのへんをやっているようですが、それが「1年に1回のことだからいいわよ」と言ってやってくれています。だからそれほどネックにはなっていません。

出席簿の件なんですけど、それまでは国立では一枚の紙で表が男なんですよ、裏返すと女の子の名簿を書くようになっていたんですよね。それも、これはねやっぱりね、自分たちがその学校の中で教務主任とか、そういうのをやることによってこれも達成できたんだけど、教務主任会とかそういう所へ出て行って、混合名簿というか男女別名簿の問題点など全部言うんです。市教委にガンガン文句をそういう中で言うんです。こんな名簿の様式はおかしい。出席簿の様式を変えてくれ、ということはずうっと市教委の方に要求しました。

その結果 1990 年度からなんですけど、国立ではこういう出席簿を作りました。これは縦にこういうふうになっていまして、上から下まで一列にばあっと 50 名の名前を書けるようになっていまして、ここに一列で男女を書いていくという形の出席簿を作っています。

一応これを元に国立だけでなく東京都の中でも目黒区の方にもこういうのを全部……目黒。杉並・八王子・新宿と色々な所に国立の出席簿を一冊ずつ私があげまして、それぞれの目黒区とか新宿の区教委交渉をしまして、出席簿の様式が大分東京都の中でも変わってきているんですね。ただ、こうやって出席簿の様式が変わっても、男女別名簿をやっていた先生というのは、これに上から男の子をば一つと書いて、間をちょっと空けて下にば一つ女の子の名前のハンコを押してゆくという形を使っているという方たちはたくさんいるようです。

東京で杉並区などは一応、区教委の方で混合名簿という形を出したんですけど、現場の先生たちに意外と不評なんです。学校の先生というのわりと行政サイドから下ろされてきたものに対して、反発するというような、そういう體質もあるらしいんです。上から混合名簿でやりなさい、なんて言われると、なんでそんなこと言われなきゃならなのよ、みたいな形で反対すると言うようなこともあるんですね。行政を動かしながらやっていくということももちろん必要なんだけど、それもね、あまり行政主導型になってしまうと、現場の先生たちが付いてこないという問題点もありますね。国立の場合にはもうまったく現場の私たちの声を反映させたということなのでそこら辺はちょっと違うかな？ という感じがしています。

< 男女平等教育へ >

それから国立市では、一番の目玉商品としましては国立市男女平等教育指導手引きという、これ先生たち用の指導手引き書なんですけども、これを 6 年間がかりで小学校の低学年中学年高学年用という形で作成しました。これの委員にも私はなっているんですけど、ある程度意識のある先生たちが各学校から入りまして、現場の声を反映させながらという形で手引き書を作りました。

先ほどどなたか男の方が性教育の問題をおっしゃっていたんですが、これは本当に大事なことで、性教育も私は男女平等の視点からの性教育を、ということはずうっと話はしてきていますし、子どもたちにもそう実践してきているんです。この手引きの申でも今私たち国立では、性教育とは言わないんです。

私たちのイメージでは、今迄の性教育というのは、いわゆる初潮指導とその手当て、手当て的なものと女の体・男の体という形の性教育しか受けてきていないんですよ、私も学校で。小学校、中学校を思い出しても。そうではなくて、人間をもうちょっとこうトータルに見て、やっぱりセックスとジェンダーとセクンヤリティの側面から性を見てゆく、ということの視点に立っていますので、私たちは佳教育と言わないで、「性の教育」というふうにあえてそこに「性の」というひらがなの「の」を入れて、「性の教育」を進めるということなんですけど、男女平等の視点にたった性の教育をということで、そういう取り組みもしています。

< 混合名簿からジェンダーフリーな教育へ >

時間が大分かかりましたね、ごめんなさいね。まとめなくちゃいけないんだけど、ただ混合名簿をやってきて思ったことは、名簿だけが混合にならたからと言って、けっして学校の中というのは、男女平等教育というのがね、うまくいくかと言うとそうじゃないんですよ。それで男女混合名簿をなぜやるのか、そういうところをもうちょっと考えると結局私なんかは、学校の中で女とか男とかいうふうにな、そういう性のベールを掛けて子どもを見たくない、というのがすごくあったんですよ。女とか男とかいう形で一人一人の子どもを見てしまうとね、その子を、目の前にいる子どもが見られなくて、あっ、この子は男の子のこういう子なのねとか、女の子なのねという形でね、どうしてもね、女・男で見てしまうというのがあります。

先生たちも男とか女とかという括りで見えていますから、うちのクラスの女の子はこうこうこうだとか、うちのクラスの男はうるさいとかね、なんだか高学年になると女子はめんどくさいとか、そういう様な形で括って見るんですよ。

だけどそれは本当に子どもたち一人一人を大切にしていこうということにはつながらないわけですよ。やっぱり混合名簿を使っている先生でも先生によっては、平気で「あんた男の子なんでしょう」と言ったり、「あんた女の子のくせになんでそんな言葉使いして」とか、全然自分の中で矛盾を感じないで、混合名簿とか混合並び方はやっているのに、そういう形で普段の言動が、やっぱり男とか女とかいわゆるジェンダーにとらわれている先生たちが、国立でもものすごく多いんです。だから私は国立がその名簿とか並び方とか呼び方が「さん」呼びとかね、そういうことが見た所では浸透しているんだけど、もう一度本質的な所に立ち返って、ジェンダーフリーな教育を、ジェンダーにとらわれない教育を目指すんだということにしないとダメだと思います。本当に形式、単に形式主義じゃないかという批判を昔受けたことがあるんですけども、そういうこともありますので、もうちょっと、なぜ混合名簿にするのかというところをね、しっかり一人一人がとらえていかなきゃいけないと思っております。どうもありがとうございました。